

# 寺下英明氏を偲んで

長谷部 八 朗

二〇一三年度は、本研究所にとって激動というにふさわしい年度であった。巻頭文でも触れたように、吉津宜英先生の定年を控えた時期という事情を背景として、所長職を交代したのが本年度の初めであるが、私が学生部長職を兼任したために、実質的には吉津先生に、引き続き本研究所の運営の多くを引き受けていただいていた。

したがって、昨年七月初めに寺下氏の訃報に接し、その追悼文の本誌掲載を決定した時も当初は吉津先生に執筆をお引き受けただけのことになっていた。それが年が改まってすぐに、当の吉津先生への追悼文を書かねばならなくなる事情になり、交代する形で、吉津先生に比べてお付き合いの頻度が高くない寺下氏への追悼文を私が書くことになったのは、二重三重に残念なことである。

寺下氏が本研究所に参加されるようになったのは一九九九年以来のことである。詳しい契機は吉津先生が中心となって運営されていた時代のことであり、分かりかねる部分があるが、本研究所とも関係があった「仏教経済フォーラム」に参加されていたことからのご縁であったと推測している。

文末の紹介の中にもあるように、寺下氏が本職としての金融部門でのお仕事と並行して、仏教についての研鑽と

共に、それに付随する多くの活動にいそしんでおられたことは明らかである。それは例えば、仏教伝道協会などで活動に現れる、「仏教」それ自体への関心とともに、「仏教を経営に活かす会」という所属団体の名称に典型的であるように、仏教の教えを社会に広めていきたい、仏教の教えを経済的・社会的実践につなげていきたい、との意欲があつてのことではなかったかと推察している。そうした活動を行う際に、寺下氏が強調し、基盤としていたのは、在家仏教者への積尊の教えという形で理解されていた「共生・知足・中道」という三つの柱であつた。この内容は、後述する本研究所主催の講演会でのお話の記録（『仏教経済研究』四一号所収）に残っているので、詳しくはそちらを参照していただきたいが、言葉で語るだけでなく、日々の生活や実践の中で常にそれらを意識していたのが寺下氏の行おうとしていたことではないかと考えている。

本研究所の例会は大学の休暇期間中を除いてほぼ毎週、年間三〇回ほど開催している。寺下氏が研究所に参加されるようになって以来、本務で海外などに行かれる時を除いてはほぼ毎週参加して下さり、もつとも熱心な参加者のうちのひとりとして活動を継続して下さっていた。

前記したように、寺下氏の例会参加は、本来は仏教それ自体が持つ教えなどへの関心からの動機が出发点ではなかったかと推察されるが、本研究所の例会での報告内容は、本号巻末の活動報告にもみられるように仏教に関連するものとは限らず、多様な領域の報告が行われている。あるいはそれに疑問や不満を抱く参加者もいるやもしれないが、寺下氏は報告テーマがどのような分野の内容であっても、旺盛な知的好奇心から、常にもつとも熱心な聴講者として参加して下さっていた。特に報告者が若い世代である場合は、さらにその傾向に拍車がかかっていたのではないかと思われる。

私にとっては、寺下氏との交流は例会や学期末に開催する納会の場での交流が主なものであった。そして年一回ほど行う私自身の報告の際、その報告の内容を、ご自分で報告を聞きながらメモした内容をもとに、事後にまとめなおしたものを送っていただいた。他の多くの方々にも同様のことをなさっていたのだが、それはあくまでも寺下氏自身のまとめ直しであり、当の報告者からすれば意外なまとめ方も含まれてはいた。そして、「これをもとに家族に聞いた内容を説明するのです」と語りつつ、同時に「自己流で申し訳ないが……」という言葉添えて渡してくださいました。ただ、ある部分では「あなたの報告はこう聞こえますよ」と、その報告内容を一層磨きあげるときことを叱咤激励する意味も、あるいは含まれていたのかもしれない。そうしたご自身のため、そして報告者のために行っていた例会への真摯な参加は、「最良の聴き手」である寺下氏のあり方を実証するとともに、例会の活性化に大きな力を持っていたといえるのである。

寺下氏のご自身が二〇代である一九六〇年代から総理府日本青年海外派遣団に所属し、さらに一九七五年には東南アジア青年の船・ナショナルリーダーとなり、以後も多くの青年国際交流事業関係の活動を継続してこられていた。この活動自体は今上天皇のご成婚を記念して「青年」の海外派遣を目的に開始された事業であるが、晩年を迎えられる頃になってもその事業に参加し、青年と共同行動を行っている写真なども見せていただいたことがある。そうした写真に写っている、参加している青年に対する暖かな笑顔とまなざしは、本研究所の例会時の若い発表者へ終始一貫して注がれていたものと、そして報告後に彼らに対して発せられる励ましの言葉と共通するものがあつたのではないかと感じている。

寺下氏の参加されていた青年国際交流事業は、東南アジアを主な対象としていたが、JICAの金融専門委員と

して東南アジアや中国に派遣され、当地での信用保証制度の導入や指導などを行った活動は、あるいはご自身の意識中ではその延長線上にあったものであったかもしれない。それらの成果のごく一端を納会での座談の中などがかがうことがあったが、「新興の国々」の「新興の事業」への貢献を果たしていることへの意気込みと喜びがひしひしと伝わってくるお話の内容であった。

本研究所の事業への寺下氏の参加は、例会への参加にとどまらず、研究所発行の紀要へも何度となく投稿していただき、内容の充実にも貢献していただいた。しかし、振り返ってみて、寺下氏に本当にご負担をかけ、お世話になったのが二〇一一年に起きた、かの三・一一東日本大震災の直後、三月一八日に開催した講演会である。未曾有の災害の直後だけに講演会開催自体を自粛すべきか否かを問題とすべき状況にあったが、寺下氏は「こうした状況下で講演会を開催することは確かに不謹慎かもしれないし、参加者もほとんどいないかもしれないが、与えられた状況自体を敬尊のおぼしめしとして開催いたしましょう」とおっしゃり、開催を決定したという経緯がある。講演者という立場からは、ある意味苦渋の選択という面があったと推察するが、講演会からその後の懇親会までの時間に、精魂を傾けてくださったことは、その当時からやや体調を崩し気味であったことも併せて考えると、本当に頭の下がることであった。

寺下氏は、晩年『しあわせってなんだろう』という一九八七年に出版した著書を文芸社から文庫化している。全一二三篇の題材を通じて寺下氏にとっての「しあわせ」を書きつづったものであるが、その中で「私にとって、しあわせってなんだろうといえば、私の生き方や考え方、つまり私自身の精神が大切にしている、人間としての私を、

日々の生活のそこそこで、感じとったひとときのことをいうのです」と書いている。

本業として晩年まで奔走なさっていた信用保証事業の拡大普及の活動から、本研究所の例会への参加にいたるまで、寺下氏のすべての実践が、そうした「しあわせ」を求める活動であり、同時にそれらすべての活動の中で「しあわせ」を感じ取っていたと思われてならない。だとすれば、講演会開催の選択と、その後の懇親会を含めた時間が、そうした「しあわせ」を感じ取ることのできる時間であったことを祈るばかりである。

本研究所に様々な貢献と多くの刺激を与えてくださった寺下氏ではあるが、晩年に体調を崩されてからは徐々に例会への参加回数も減り、入院などの報も伝わっていた結果として訃報に接することになり、誠に残念なことであった。JICAでの活動を退かれてから、「佛教タイムス」の経営を引き受けられたが、そうしたいわば本業に関しては、私自身知ることが少なく、ここで振り返ることができないのは残念である。限られた内容にしか触れ得なかったが、寺下氏がわれわれに残してくれた多くのことの一部を振り返ることで追悼の意を表することとしたい。

今後とも浄土からのわれわれにたいする暖かなまなざしを期待しつつ、ご冥福をお祈り申し上げたい。

合掌

## 寺下 英明 略歴と主著

## 略歴

- 一九三六年 山口市生  
 一九五八年 山口大学経済学部 卒業  
 一九五八年 全国信用保証協会連合会入社  
 一九九九年 国際協力機構（JICA）Japan International Cooperation Agency）金融制度専門員（海外金融制度調査担当）  
 二〇〇七年 株式会社・佛教タイムズ社（代表取締役社長）  
 社会活動等

- 一九六一年 総理府日本青年海外派遣団・欧州班団員  
 一九七五年 総理府・東南アジア青年の船・ナショナルリーダー  
 以後、総理府・青少年問題審議会委員（八・九期）、日本青年国際交流機構・初代会長、東京都青少年問題協議会委員、財団法人青少年国際交流推進センター理事など、青年国際交流事業関係の活動を歴任  
 一九八一年 財団法人仏教伝道協会「仏教聖典を経営に活かす会」  
 一九九三年 日本経営協会：SAM（Society for Advancement of Management）  
 一九九九年 駒澤大学仏教経済研究所研究員

## 主著

- 『信用保証論』 太平社、一九九六年  
 『しあわせってなんだろう』 ワコー社、一九八七年（二〇二二年、文庫化、文芸社版）  
 『中国中学生諸君』 広西人民出版社、一九八七年  
 『ばいあすの邦』 ワコー社、一九九一年  
 詩集『海の日』 ワコー社、一九九三年